

主題A「人生とキャリア」の検証

| | | |
|------|---|-------------------|
| 葛城浩一 | 一 | (大学教育開発センター准教授) |
| 佐藤慶太 | 太 | (大学教育開発センター講師) |
| 藪添隆一 | 一 | (教育学研究院教授) |
| 時岡晴美 | 美 | (アーツサイエンス研究院教授) |
| 加野芳正 | 正 | (教育学研究院教授) |
| 武重雅文 | 文 | (アーツサイエンス研究院教授) |
| 清國祐二 | 二 | (生涯学習教育研究センター教授) |
| 藤本佳奈 | 奈 | (教育・学生支援機構特命助教) |
| 山本珠美 | 美 | (生涯学習教育研究センター准教授) |
| 西本佳代 | 代 | (教育・学生支援機構特命助教) |
| 杉本洋一 | 一 | (キャリア支援センター客員教授) |

はじめに

平成23年度から、「人生」や「生き方」といった広い意味での「キャリア」をテーマとした主題A「人生とキャリア」が必修化された。この主題A「人生とキャリア」は、香川大学共通教育スタンダードのうち主として「市民としての責任感と倫理観」を育むことを目指し、学士力の「倫理観」「市民としての社会的責任」に資する科目である。21世紀に生きる市民はどのように生きるべきか、また生きているのかについて学んでいくとともに、高校から大学、さらに社会へと出ていく学生が、市民としてこれからより充実した人生を歩み、キャリアを積んでいくための手助けとなる授業群として設定されたものである。

主題A「人生とキャリア」は、平成23年度は12科目開講されている（前期9科目、後期3科目）。本稿執筆時点では、後期の授業が終了していないため、前期の授業についての印象であるが、大きな問題もなく概ね順調だったとあってよい。学生による授業評価の結果をみても、総じて高い評価を得られていることが確認できる。各担当教員のご尽力の賜物であり、主題A「人生とキャリア」のコーディネーターとして深く感謝する次第である。

それでは、主題A「人生とキャリア」では、具体的にどのような授業が行われていたのだろうか。本稿では、各担当教員がどのような授業を行ったのかについて、授業の進め方、「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い、評価方法、教育成果という点から、紹介していただくとともに、来年度の課題についても検討していただいた。そして最後に、それらもふまえた上で、主題A「人生とキャリア」自体の来年度の課題について言及したいと考える。

(葛城浩一)

幸福論－「よく生きること」への哲学的アプローチ－

1. 授業の進め方

この授業の趣旨は、「幸福（＝よく生きること）」の問題について哲学的に考察する、というものである。授業は大きく3つに分かれる。第1ブロックでは、幸福な社会とは何か、という問題を取り上げる。第2ブロックでは、「親密圏」（愛情など特別な関係で結ばれた人々からなる領域）における幸福について考える。第3ブロックでは、「私」にとっての幸福とは何か、ということテーマにする。第3ブロックの後半では、大学教育開発センターの葛城浩一准教授にお手伝いいただき、自分の幸福観と将来像についてまとめ、発表する、という授業を行った。

哲学には、近づき難いというイメージがつきまとっている。これを払拭すべく、椎名林檎や宇多田ヒカルの楽曲や、漫画『美味しんぼ』、映画『白バラの祈り』、『誰も知らない』などを題材として、「幸福」の問題について、個人、あるいはグループで考える、という戦略を採った。あわせて、関連する哲学の文献を紹介し、より本格的に取り組むための手がかりを適宜与えるようにした。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

ルール、マナーを直接的なテーマとして扱ったものとして、第6回に教育・学生支援機構の西本佳代助教に「市民としての責任ある行動」というタイトルで、授業をしていただいた。その他の回では、直接的に「市民としての責任ある行動をしなければならない」という話はせず、倫理的な問題について意見を述べさせ、その根拠を意識させる、という方法をとった。一般に〈自分勝手な行動〉を擁護する意見は、その根拠づけの点で弱さを露呈する。逆に、強固な根拠に支えられた意見を述べようとすると、おのずと市民としての責任ある行動の必要性が浮かび上がってくる。こういった点に示唆を与えつつ、自ら考えるなかで「市民としての責任感と倫理観」の必要性に気づけるように、受講生を導いた。

3. 評価方法

成績評価において考慮の対象としたのは、①授業中のグループワークやミニレポートの提出状況、②第13、14、15回の授業で行うプレゼンテーション、③最終レポート、の3つである。割合は、授業内の活動（①、②）40%、最終レポート（③）が60%である。グループワークを行う際には、グループワークシートを用意し、各グループの参加状況を確認した。第13、14、15回目におこなったプレゼンテーションでは、グループ内発表を通じてグループ代表に選出された学生には5点加点、全体で上位3名に選ばれた学生にはさらに5点加点した。また、正課外で行われる学生基礎力UP研修を修了した学生には、最大で10点の加点を行った。

最終レポートでは、授業内で取り上げたテーマから1つ選んで、2,000字程度で論じることを課した。その際、「自分なりの答えを出すこと、またその答えをただ書くのではなく、きちんと根拠づけをすること」を条件とした。

4. 教育成果

この授業では「自分の意見を、きちんと根拠づけること」を常に意識させるようにしていたが、授業前半で提出されたミニレポートと、最終レポートの内容を比較すると、全体として、根拠づけのレベルが非常に高くなっていることが確認できた。担当者としては、これが最大の成果であったと考えている。

学生による授業評価では、「この授業は、将来の自分にとって有益である」の値が4.17、「あなたは、総合的に判断してこの授業に満足していますか」の値が4.11であり、主題Aの中でも比較的高い評価が得られた。「哲学」を表に出して授業を展開したにもかかわらず、こういった評価が得られたことには、うれしい驚きがあった。ただし「あなたは、この授業の到達目標が達成できましたか」の値は3.56と、平均は越えているものの比較的低く、この点については今後検討の余地があると思われる。自由記述には、以下のようなものがあった。

「すごく不思議な感じです。授業を15回までやって単位が出たらハイ終わり、という感じではなく、生活の一部に溶け込む感じでした。幸福について確かな自分の答えはまだ分かりません。…考えろと背中を押されたようです。今まで持っていた考えが揺らぎましたが、それもよかったように思います。」(医学部)

「最初は、哲学的なことばかりをやって難しいのかと思っていましたが、楽しみながら「幸福」について学べたと思います。答えは一つではないと思うので、大学4年間でもっと深めたいと思います。」(経済学部)

5. 来年度の課題

上述のように、この授業では第13、14、15回において、自分の幸福と自分の将来について考え、発表するという課題を設定し、葛城准教授に担当していただいた。この課題自体は主題Aの趣旨とも合致しており、授業内容も非の打ちどころがないものであったが、それ以前の授業で抽象度の高い哲学的問題をテーマとしていたために、両者の接続がなかなかスムーズにいかなかったように思われる。来年度は、抽象的な哲学的問題と、学生個人の将来設計という具体的な問題との有機的な連関を明示できるような授業デザインが必要であると考えている。

(佐藤慶太)

自己実現の臨床心理学

1. 授業の進め方

(1) 夢分析 (第1－6回)

この授業は、受講学生に夜に寝てみた夢 (dream) を記録して提出することをすすめることから始めた。学生の夢はどれも貴重な内的世界からのメッセージだった。それらの中から、青年期の心の課題を読み取ることができる夢をピックアップし、次々と読み上げてコメントしていった。

夢分析は精神分析の「王道」であるとフロイトは言った。フロイトは夢分析を治療方法として開発した。その後、ユングは自分自身の可能性に気づくための方法、自己発見の方法として夢分析をとらえた。ユングは個人的無意識の深層に集合的無意識があると考えた。つまり、個人的な可能性を追求する夢分析の、さらに深層心理分析にまで掘り進めることによって人類としての普遍性に到達する可能性を追求したのである。この追求の目的を「自己実現」と言う。このような意味で、学生が毎晩、眠りの中で見ている夢について吟味することは自己実現への心の旅へと誘うことになると考えたのである。授業では読み切れないほどの数の夢の中から普遍的なテーマの夢を抽出することができた。

(2) 事例精読 (第7－10回)

「学校カウンセリングの実際」(藪添・東山共著、創元社)の読み聞かせと解説。児童生徒の心理的問題について教師、保護者の教育相談に応じて、教師と保護者の教育力を治療力に変換し、回復を目指した面接記録を解説していった。「心を病むこと」とは「心の営み」の一つである、との臨床観を学生に提示した。

(3) 面接ビデオの鑑賞と考察 (第11－13回)

「教師コンサルテーション」(藪添・倉光、放送大学)を鑑賞し、教師コンサルテーションの実際について解説する。また、子どもの問題の改善についての大局観について考察する。「グロリアと3人のセラピスト」(ロジャース・パールズ・エリス、日精研)を鑑賞し、偉大なカウンセラーによる面接の実際と解説に触れる。それぞれのカウンセラーの人間論(人間とはなにか)、病理論(心を病むとはどのようなことか)、治療論(治す、治るとはどうする、どうなることか)について考察する。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

(1) 夢のレベルでは、人は極めて誠心誠意人間社会に対して誠実であろうとしている。その倫理観とは人の本性に根ざしているのであるが、不自然な生き方やごまかしに満ちた生き方をしようとしている自分自身に対して、夢は警告のメッセージを送ることも多い。つまり、夢分析の創始者ユングは深層心理学の最終的な効果として人が人の本性に目覚めて本来的な「人と人の間に生きる」能力を十全に獲得すること、つまり自己実現を提示したのは「市民としての責任感と倫理観」の内発的な獲得を意味するのである。

(2) 上記(1)に挙げた自己実現はユング心理学に限らず、カウンセリングの各流派に見られる人間論、病理論、治療技法論に共通している。特に、1950年代アメリカで開発されたカウンセリングの主要理論は健康な一般市民がよりよく生きて行くための促進的カウンセリングなのである。その代表者カール・ロジャース、フレデリック・パールズ、アルバート・エリスの面接の実際や授業者藪添の教師コ

ンサルテーション面接録画を観ながら心理的成長を促すカウンセリング関係を紹介したことは「市民としての責任感と倫理観」が自分自身に対する誠実さに由来することの学習とも言えるだろう。

3. 評価方法

原則として1回の期末試験で評価する。ただし、期末試験に出題する問題を毎回の授業で予告し、解答をも含め、レクチャーのテーマとする。問題は、キーワードを書き入れる単純な形式であった。キーワードは簡単に暗記できるものであるが、設問文章の文意を理解できないとキーワードが想起できない。逆に、文意を理解できれば、文中の語彙の中にキーワードが見つけることができるというサービスも用意していたが、気がついた学生は少なかった。出席、ミニレポートも補助的に参考とした。

4. 教育成果

学生による授業評価では、「この授業は、将来の自分にとって有益である」の値が3.44、「あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか」の値が3.19、「あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか」の値が3.41であった。

ミニレポートや夢の内容には個々の洞察が得られていることは確認できた。また、毎回、熱心に受講する学生も大勢見受けられたし、全体的に出席者数は減らず、最後まで満席の状態であった。

ただし、自己実現のための内的な洞察を促すための工夫が、大人数を対象とする本授業では必要と思われる。

5. 来年度の課題

従来、続けてきた「心理学C」と比べて、内容的に学生個々の内面に迫ることを目指し、主題に迫ろうとしたが、案外、学生の評価は低かった。やはり、大人数の講義では内的な作業を課すことは困難を伴うようである。ただし、現実的な知的認識や指示される学習に慣れた学生を、自らの内面からのメッセージに気づき、能動的な人生観を持つ存在として育成することはあきらめてはならないと思う。慣れていない思考と思想に触れることでのとまどいは、素直に表現して最後まで積極的な出席を続けた多数学生に感謝しつつ、来年度もがんばりたい。

(藪添隆一)

選択する人生と生活

1. 授業の進め方

現代社会は、人生の種々の場面や日々の生活において選択を迫られることが多く、生活者にとっての選択肢も多様に用意されている。真に自分らしい生き方を実現するために、よりよい選択をするための基礎的知識を修得し、まさに選択能力を培う機会を提供するもので、21世紀社会の諸課題に対する探求能力、市民としての責任感と倫理観の醸成を目的としている。

具体的な進め方としては、15回を3つのブロックに分けて3つのテーマを設定し、〈講義＋グループ討議＋発表とまとめ〉を1クールとして進めた。すなわち、初回到講義を受講した後、各自が自分の問題としてテーマ設定を行い、次回のグループ討議などをふまえて、個別の小レポート作成と課題整理を行う、というワークショップ型の演習を組み込んだ授業とした。グループ構成については、全員で議論することを前提に1グループ6人程度とし、できるだけ他学部生との交流の機会となるよう配慮した。

講義内容は、生活主体である学生の側からと、それを取り巻く現代社会の特徴といった側の、双方向から取り上げることとし、具体的な授業内容としては、現代社会における「選択する人生」、これまでの自分史からみた「人生の選択」、現代におけるジェンダー、家族とワーク・ライフ・バランス、生産者・消費者としての生活者、大衆消費社会における「働く」ということなどをテーマとした。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

「市民としての責任感と倫理観」については、前述の通り、授業内容にかなり組み込まれており、生産者・消費者としての生活者、大衆消費社会における「働く」ということのテーマでは、特に生活者である市民としての責務に気づき、責任感の自覚を促す内容を盛り込んだ。また、第4回の講義は、教育・学生支援機構の西本佳代助教に担当願って、「市民としての責任ある行動」というテーマで、ルールとマナーの違いを軸として、「市民としての責任ある行動」について学生自身に考えさせたり、グループで議論し発表させたりするという授業を行った。

3. 評価方法

基本的には、テーマ毎の小レポート50%、最終回に課す課題レポート50%とし、欠席は減点することとした。レポート評価に関しては、特に良く書けているものには加点することとし、結果的に総合点が満点を上回ったケースもあった。

また、任意の回に事前予告なしに「コメント」を書かせることで、受講生の反応を見るだけでなく、出欠確認の代替にも用いた。これらの「コメント」は、A3判二つ折りのリーフ「レポート・コメント集」に順次記入させ、提出された小レポートを内側に糊付けして重ねて行くことで、各自のポートフォリオになっており、最終回には受講生が自身の学びとその成果を確認することができるよう工夫した。

4. 教育成果

最終回に記述させたコメント内容から学生による授業評価をみると、非常に肯定的な評価がほとんどを占めていた。一部を抜粋して紹介すると、「この授業を通して、今までのふだんの生活では考えられなかった問題について真剣に考えることができ、今までの自分の在り方を反省し、これからの自分の将来を考えるのに、とても良いキッカケになったと思う。この時期に、こういったことが考えられたのは、これからの自分にとって非常に良かったと思います。」(工学部)、「自分と社会の関わりについて良く考えさせられた。自分の選択に対して責任を持つことが必要ということが印象に残った。」(工学部)、「この授業では、人生についていろいろ知ることができ、考えることができた。自分らしくあることにきちんと責任を持って行動できる人になりたいと思う。」(教育学部)、「色々な面から自分を見つめ直すことができたと思う。自分を大切にしながらも新しい一面を発見する力を、この授業で得られたと思うので、後期も自分を成長させられるように自身を見つめていきたい。」(経済学部)、「初めは単純に自分が納得できる答えが見つければ良いと考えていたが、授業で追究していくうちに逆に答えが見えなくなっていった。この考える過程が大事だと思うようになった。」(法学部)

一方で、ワークショップに関しては非常に高い評価をした学生と、さほど高くない学生がみられたが、グループ構成による影響が大きかったと思われる。受講生の学部があまりにも一学部に偏っており、男子学生がほとんどであったので当初予定していたグループ編成が実現できず、グループによっては当初から全員が消極的な班もみられた。しかし、ワークショップ型の授業を導入した効果はみられたと考えられる。例えば、評価の一部を紹介すると、「班として活動して、本当に色々な意見に触れられたと思う。独創的でありながらも核心をついた意見が多かったので、非常に感心させられた。」(工学部)、「グループワークには積極的に参加できなかった。しっかり意見を出せる人やまとめる人もいたので、これからもっと人とのコミュニケーション能力を伸ばして行きたいと思う。」(工学部)、「グループワークでは、高校の時より高度な意見が出るのだと思って刺激になった。」(経済学部)

5. 来年度の課題

前述のように、受講生に学部や性別の偏りが生じることもあるので、グループワークを充実させるためのグループ編成について、あるいは中盤で再編することも含めて検討が必要と考える。また、話し合いに消極的な班への対応についても課題として残されている。

(時岡晴美)

大学・就職・キャリアを考える

1. 授業の進め方

この授業は、具体的な職業を意識しながらも、自分がどのような「人生」を送りたいのか、どのような生き方をしたいのかを考えるとともに、その中で仕事の持つ重要性、ワーク・ライフ・バランスの重要性、生きがい等について学ぶことを目的としている。また、「市民としての責任感と倫理観」を、キャリア教育の視点から育もうとするものである。

具体的には、私が専門とする教育社会学の知見に基づいた講義、指定したテキスト『若者はなぜ「就職」できなくなったのか?』（児美川孝一郎著、日本図書センター）に基づいた講義、ゲストスピーカーによる講義、それらを補うものとしてのテレビ番組（「平成若者仕事図鑑」「仕事ハッケン伝」「青春リアル」「私の思考探求」）などを用いることによって進めていった。具体的内容としては、学生時代をどのように過ごすべきか、大学から職業世界への移行の問題、専門職とは何か、仕事を選択するときの基準は何か、なぜ若者の就職がむずかしくなったのか、ジェンダーは人生にどのようにかかわってくるのか、等々について具体的事例をもとに検討を加えた。

また、毎週A 4 1枚のレポート（本日学んだことの整理、授業の感想など）を課し、翌週に提出させるという方法をとった（毎週、宿題がある授業）。このレポートは個人別に束ねて、最終回に返却した。13回のレポートの束は、学生時代の「お宝」の一つになり、就活の時に活用できるのではないかと考えている。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

仕事とは何か、これは本授業に通底する問題意識である。例えば、宝くじで3億円当たった人は幸せに生きているか、無人島で一人だけで働いたとして働くことの喜びは得られるか、働くことは自分を成長させるか、社会の責任を担うことによって充実した人生が得られるか。これらのことを、本授業では繰り返し考えるとともに、ゲストスピーカーにも体験的に語ってもらった。「市民としての責任感と倫理観」を十分に考える場になったのではないか。また、ゲストスピーカーとして香川県警から2人の方（男女）に来ていただき、「防犯」に関する講義をしていただいた。

3. 評価方法

「1」でも記述したように、この授業では毎回の宿題を求めている。この宿題が8割、レポートを2割として評価した。授業への出席状況や取り組み姿勢については、毎回のレポートに反映されているものと判断している。正課外で行われる学生基礎力UP研修を修了した学生には、ボーナスポイントを加算する予定であったが、その対象となる学生はいなかった。なお、主題Aでは「秀・優」3分の1、「良」3分の1、「可」3分の1、という統一基準を設けたが、全体的に課題の提出がたいへん良好であったので「優」と「良」の割合が多く、「可」の割合が少なくなった。

4. 教育成果

学生による授業評価では、「この授業は、自分の将来にとって有益である」の値が 4.35、「あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか」の値が 3.77、「あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか」の値が 4.34、「この授業は、全学共通科目としてふさわしい内容である」の値が 4.54 であり、前期に開講された主題 A のなかでは比較的高い評価が得られた。

学生の授業評価からは「自分の進路を考えるうえで、ためになる話がたくさん聞けてよかった」（経済学部）、「ビデオがどれも心に残る内容で、普段 TV では絶対みないような番組が見られてよかった」（農学部）などの感想があった。

また、キャリア支援センター SSR 推進室が行った調査によると、授業実施前（4月）と授業実施後（7月）で「自分の意見を分かりやすく伝えること」「相手の意見を丁寧に聴くこと」「ストレスがあってもそれに耐えること」「地域社会の一員であるという意識を持つこと」「地域社会に貢献したいという意識を持つこと」「地域社会の強みや問題点について理解すること」等の項目では、スコアの明らかな上昇があった。16 項目のなかで、スコアの降下した項目は皆無であった。

以上のことから、本事業は一定の教育効果を上げたものと推察される。

5. 来年度の課題

平成 23 年度は 2 年ぶりでキャリア関係の科目を担当した。それまでは「女性とキャリア」というテーマであったが、この時の経験が本授業に活かされたと思う。授業の進め方については、基本的には受講者数や受講者の学部構成に影響を受けるので、蓋を開けてみないとわからない部分がある。平成 23 年度は受講生が 200 名を超えたので、座学中心、教師から学生への一方通行という、これまでの大学教育の延長上で行われた。部分的にでも、学生のグループワークを取り入れられないか、学生参加型の授業に転換できないか、検討を加えてみたい。

授業改善のポイントとしては、15 回のシラバスの流れ（15 回のストーリー）を明確にすること、ゲスト・スピーカーの役割（話してもらった内容）を明確にすること、学生の主体的参加を一層促していくこと、等が考えられる。

(加野芳正)

人生の社会学－「私」という「役」－

1. 授業の進め方

この授業は、個人と社会の関係を、社会のなかで果たす個人の役割を中心に考えていくものである。自我は他者との関係のなかで育まれるが、青年期においてはえてして私（自我）は私であり社会とは無関係と思しやすい。そうではないことを、日々の他者との関係性を示す役割という観点から、学生諸君に省察する機会を提供することが授業の主旨である。このため、まず各々が現在持っていると思われる社会的役割を想起してもらい、そのなかでも特に重要となる家族、友人、将来の職場の人間関係に関する名画三作を鑑賞し、そのあとに問題となる役割等についてグループ討議を行った。さらに最後に、自我と社会的役割の関係を映画「生きる」を鑑賞し、グループで考えていくという構成とした。

授業の全体構成は、映画1作の鑑賞・グループ討議とレポート作成・レポートを資料とした講義を1クールとし、計4クールを真ん中に据えた。その前後にオリエンテーションやグループ分け、ならびにゲスト・スピーカーによる授業（今－学生生活－を考える）、授業の総括をおいた。ゲスト・スピーカーの授業では、これまでの授業を受けて考えた、学生として身につけたい能力とそれを育める授業概要についてのグループ討議が展開された。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

この授業では、「市民としての責任感や倫理観」育成についての特別な取り扱いはしていない。これは本授業の授業内容からすれば、該当する初年次の学生にとってこうした特別な取り扱いがタテマエの説教になる可能性があることを危惧したからである。こうしたタテマエ学習よりも、自己の有する役割に敏感になることによって役割の規範や、他者の役割期待ならびに他者理解への関心も深まろう。それを通して、社会における一般的な役割＝「市民としての責任感と倫理観」もおぼろげには見えてくる。少なくとも、個人と社会の関係への認識は深まってこよう。今回、この点に関して特別な配慮をしなかったのは、こうした考えからである。

3. 評価方法

評価に関しては、4回のグループ・レポート作成への参加と最終レポートの点数によって行った。グループ・レポートへの参加は出席点とし、各回10点を配点した。最終レポートは60点満点で採点した。

出席点に関しては、74%が全出席、22%が3回出席とほとんどがクリアでき、単位不取得者は、全履修者125名中の5名のみであった。評価結果は、S 11%、A 33%、B 45%、C 7%、試験放棄4%であり、担当者会議での申し合わせに比し、Bが多めに、Cが少なめになった。

4. 教育成果

学生による授業評価では、「授業の到達目標の達成に向けて、授業全体が組み立てられている」が4.02、「この授業は、将来の自分にとって有益である」が3.91、「あなたは、この授業の到達目標を達

成できましたか」が3.66、「あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか」が3.97であった。これらの値は、主題A全体の平均値とほぼ同水準のものであり、授業内容自体に関してはそれなりの評価を得られたと考えている。また自由回答でも、「映画が観れて楽しかったし、それについて深く考え、自分についても振り返ることができたのでよかった」（教育学部）、「ビデオ後の討論会はよかった」（経済学部）、「授業内容がとても興味深かった。ふだんあまり観ない内容なので新鮮だった」（法学部）など、映画鑑賞やグループ別ディスカッションといった授業方法についても肯定的な評価を得、授業方法にも一定の評価を得られたと思う。

ただ、自学自習の促進度については2.57と低い値に留まっている。これは授業以外にこの授業に使った時間がほぼ1時間未満であったことによるが、授業方法に時間外の学習を組み込むなど今後の改良の必要性を示唆するものともいえよう。

5. 来年度の課題

本授業は、自己の社会的役割についての関心を高めるため関連する4回の映画鑑賞と、その内容についてのグループ別討論ならびにグループ別レポート作成、提出レポートを参照した映画批評という構成を取ったが、上述の通り、こうした授業内容および授業方法については受講生からかなりの評価を得た。したがって、来年度もこの構成を継続して行おうと考えている。

しかし、課題として浮かび上がったものもある。その第一は、時間外学習に見られるような授業への取組を促進させることである。グループ討論を活性化するためにも、あらかじめ課題について個人で考える時間を授業時間外に設定するなど、授業準備を促す方法を来年度には実施する予定である。また、授業準備度を評価の項目に加えることも考える必要があるだろう。これは評価方法の改善という観点からも、検討すべき課題と思われる。

さらには、本授業というより主題A全体におよぶ課題もある。グループ分けに影響する学部別受講生数の偏り、「市民としての社会的責任感や倫理観」という知識、技能では測れない態度の評価、ゲスト・スピーカーとの連携のとれた授業構成などがそうである。来年度は、これらの課題をも視野に入れて、授業を実施したいと考えている。

(武重雅文)

自己開発へのチャレンジ

1. 授業の進め方

本授業の目的は、①学生が自立へ向けて自己形成することができるよう、②ワークショップの手法を用いることによって自らの学習課題を自覚させ、③他者の力を借りることで深い理解に到達することにある。「自己開発へのチャレンジ」という題目に込めたねらいは、学生が自らの殻を破り、外界へ一歩踏み出すことにより、自己と他者とを含む環境が変化することを自覚させることにある。

その「踏み出し」とは学問の世界への踏み出しである。これまで触れたことのない価値との出会いから、従来の自己を再構成して欲しいと考えた。疑う余地や余裕のなかった高校までの学びから、疑うことから始まる大学の学びへのシフトがひとつある。正解のある世界でいかに効率的にそこに到達するかを考えてきた高校までと、正解のない世界でいかに多面的に解決の方向を探るかを考える今後へのシフトもある。これらのシフトがその踏み出しとなる。

これを講義とワークショップとを組み合わせることで進めた。問題提起にあてる講義の時間とそれをもとに少人数のグループで考えるワークショップの組合せである。同時にコミュニケーション能力の育成にも配慮し、ふたつの「きく（聴く・訊く）」ことに注意を集中させ、学習を進める上で重要となる良好な関係づくりを行った。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

本授業を進める上で、「義務や責任」あるいは「倫理や徳性」は鍵概念であった。特別に「市民としての責任感と倫理観」と題した授業は行っていないが、各回の授業では常にそれらを意識していたといってよい。関連の深い授業とすれば、「公共を考える①②」「自由と責任を考える」「権利と義務を考える」等がそれにあたる。現代日本は公私二元論ではもたない社会となり、「新しい公共」を加えた三元論への移行が大きな課題となっている。公共の担い手としての市民なくしては社会の維持もままならない。責任感や倫理観はここで議論の争点となる。

一方、責任感や倫理観は社会正義とつながっており、「上っ面のきれいごと」で済まされてしまうことが多い。「それは社会にとっては必要不可欠なことであり、誰かがその責務を引き受けなければならない」ことはよくわかるが、「その責務を負うのは他の誰かであって私ではない」といった話に墮してしまふ可能性がある。そうならないように、私自身の地域活動を例にあげながら、そこに流れる精神性を題材にして考えてもらった。

3. 評価方法

評価を細かく点数化しているわけではないが、いくつかの観点で総合的に評価するようにしている。講義スタイルの後には基本的にコミュニケーションカードを配付し、記入させ、回収している。次の時間の最初に前回授業の確認や補充をするためであるが、これへの記入をもって出席とみなす旨伝えている（記入の少ない提出物は出席とはみなさないことと、評価の中の2割程度のウエイトであることを口頭で伝えた）。ワークショップスタイルの場合、グループの取組成果にはメンバー全員の名前

を書かせ、その成果と学生を照合させて日常点を加算する（出席＋態度として3割ほどの評価を与えたが、学生には伝えていない）。最終課題はレポートであり、自己開発の観点から、大学4年間の見通しを綴ったものを提出させた（これが4割ほどの評価となる）。その他に、正課外で行われる学生基礎力UP研修への参加、出席回数によって加点した。

4. 教育成果

授業評価のポイントよりも、授業者の感覚で教育成果を述べてみたい。常時出席していた学生の3分の2は講義を聴く態度、ワークショップに参加する態度が向上したように感じる。大学生活のオリエンテーション、授業参加とコミュニケーション、授業の相互性、講義を聴く姿勢とノートテイキングのスキル、などを意識的に授業内で伝えるようにしたことの結果であると考えられる。高校までとは異なった大学の授業に戸惑いつつも、そこで溺れることなく適応して充実した大学生活を送るためには、一歩前へ能動的に行動することが重要であることが概ね理解されたようである。

一方で、ほとんど改善の見られない学生がいたことも事実である。グループワークへの参加の姿勢が受動的なままであったり、机に伏せて参加しないだけでなく他のメンバーの士気を下げる行為を複数回行ったりする学生である。授業後に直接指導したこともあったがほとんど改善は見られず、空しさや無力感にさいなまれることもあった。学生個人の「生きる・生活する」価値観に影響を与えようとする授業は、通常の知識伝達型の授業との大きな違いを感じた。

5. 来年度の課題

今年度は初めての開講ということもあり、授業計画は立てたものの手探りの状態で進めていった。特に、授業が「講義プラスワークショップ」の組合せであり、スムーズに進むのが心配であった。普段余りに懸けない受講生との関係づくりや学びの環境づくりなど、一定の見通しが立った。来年度は、ワークショップの質を上げるための教材開発を、私自身の「自己開発へのチャレンジ」としたい。

(清國祐二)

キャンパスライフを考える

1. 授業の進め方

学生が充実したキャンパスライフを送り、市民としてより充実した人生を歩みキャリアを積んでいけるように、大学内外における「他者支援活動」を取り上げる。授業の前半部分では、ボランティアやピア・サポートのような他者支援の意味、香川大学や他大学の実践事例を学び、大学生活の中で自分たちは社会、地域、大学、そして身近な友人、同級生、家族に対してどのような支援を行うことができるのかを考える。授業の後半部分はグループワークが中心である。他者支援活動をプランニングし、プレゼンすることを授業の最終課題に設定した。具体的には、社会における様々な問題（困っている人）に目を向け、その問題（困りごと）を解決する（改善する）ために、香川大学生として何ができるのか考え、解決策を提示することである。この解決策については、授業終了後に実践へ移行するきっかけとすべく、できるだけ具体的（現実的）なプランニングを行うよう指導している。これら一連の作業を通して、学生がキャンパスライフをいかに過ごすか、さらには社会の中で自分たちが果たすべき役割について深く考えることを期待している。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

「市民としての責任感と倫理観」は、この授業全体を通して培われるべき課題である。上述した他者支援活動をプランニングするという課題に取り組むには、学生は社会における様々な問題に目を向けないといけない。そして、その問題の解決策をプランニングするには、香川大学生として何ができるのかを具体的に考えないといけない。これら一連の作業は、学生にとって社会の中で果たすべき役割を考える契機になる。すなわち、本授業を通じた実践が「市民としての責任感と倫理観」の育成につながっているといえる。

3. 評価方法

この授業では、出席状況、提出物およびプレゼンテーションで評価を行う。出席状況の配分は50点とし、ミニレポートならびに出席カードにより確認している。提出物の配分は30点である。個人の課題として先行事例の調査レポート（第10回）、支援策の企画書（第8回、9回）を評価対象としている。プレゼンテーションについては、配分を20点とし、最終選考に残ったグループ、最終選考において上位に選ばれた2グループには加点を行うことにしている。さらに、正課外で行われる学生基礎力UP研修を修了した学生には、ボーナスポイント（5点）を加算している。

4. 教育成果

本授業は後期開講の授業であるため、本稿作成の時点では10回目の授業が終了した所である。そのため、授業全体を通じた教育成果について述べることはできないが、以下では学生の授業に対する感想文、グループワークの様子から、本授業の教育成果について考察を行いたい。

授業前半部分にあたる講義については、「何のためのボランティアか改めて考えた」、「ボランティ

アを行う際、ステークホルダーについて考えないといけないと思った」、「社会で必要とされる人材像が変化していることに危機感を覚えた」などの感想が見られ、ボランティアや他者支援に対する理解を深めるとともに、社会や将来について考える契機にもなったようだ。

また、本学や他大学におけるボランティアや他者支援活動の事例に対しては、「学生のプレゼンが堂々としていて驚いた」、「自分も人前でしっかり話せるようになりたい」、「学生だけでカフェを運営しているのに驚いた」、「(被災地に行く)行動力に驚いた」、「自分も困っている人を助けられるようになりたい」などの感想を得ており、同じ学生の話は受講生にとって大きなインパクトを持つものであった。

このように、講義や事例報告に対する感想を見るに、授業のねらいに沿った効果が出ているように感じられる。しかし、グループワークの様子をみていると社会における問題と自分たちの問題とが繋がらず、多くの班が「解決課題」の設定に苦労していた。これについては、課題設定の時間を多めに取る、グループワークに介入するなどして、学生の思考を促すなどして軌道修正を行った。

5. 来年度の課題

上述したように、社会における問題と自分たちの問題とが繋がらず、多くの班が「解決課題」の設定に苦労していた。「解決課題」を決定するには、常日頃から社会における様々な問題(困っている人)に関心を払う必要があるのだが、学生に対する要求水準を高く設定していたこともあり、教員の期待と学生の認識との間にギャップが生じていたようだ。そのギャップを埋めるために、グループで取り組む課題の設定に時間が多く取られ、授業計画が当初の通りに進まなかった感は否めない。このように今回は、グループで取り組む課題の設定まで学生に行かせたが、今後は、あらかじめ教員が課題をいくつか設定し、学生がそれらの中から一つ選択し解決プランを作成するよう、授業の構成を改めて考えたい。

(藤本佳奈)

大学入門講座－夢に近づくためのキャンパス活用法－

1. 授業の進め方

本授業は、「大学とは何か」について学び、大学卒業後の人生を視野に入れつつ大学4（6）年間でどのように過ごすべきかについて、一人ひとりが考えるための授業である。

高等学校卒業後の進路にはさまざまな選択肢があったはずであるが、大学進学率が50%を超える現在、多くの大学進学者は、それが選択肢の中から選び取ったものというよりは、小学校の次に中学校があるように、高等学校の必然の延長として大学を捉えているように思われる。しかし、日常レベルにおいては、多くの学生が親元から離れて一人暮らしをはじめ、生活全般について自ら責任を持たなければならない。大学生も20歳になれば選挙権を獲得すると同時に、罪を犯せば実名報道されるなど、社会的な立場は高校生とは異なる。学習方法も、教師の指示に従って行われる学習、次の受験対策のための学習ではなく、生涯にわたって自ら学ぶ self-directed learning の姿勢を身につけなければならない。高校生までと同じ意識では、有意義な大学生活を過ごせないばかりでなく、無責任な大人となって、自らの評価、さらに所属する組織の評価を低めてしまうことになりかねない。

本授業の目的には、①大学の発展過程、および大学に期待されている役割について、説明できるようになる、②自らの大学生活の過ごし方について、計画を立てることができる、③グループワークを通して、自分の意見を表現しつつ、他者とのコミュニケーションがはかれるようになる、の3つを掲げた。これらを達成するため、以下4部の構成で進めた。

(1) 大学生活について先輩から学ぶ

教育・法・経済学部の3－4年生（計5名）を招き、それぞれのキャンパスライフについて語ってもらい（学習方法、長期休暇、サークル・部活動、読書、アルバイト、ボランティア活動等）、受講生は自らの理想のキャンパスライフについてワークシートに記入した。

(2) 「大学とは何か」について大学史の講義を通して学ぶ

中世ヨーロッパにおける大学誕生から、近世・近代の変容、日本における大学の発展過程についての講義を通して、大学がなぜ社会において必要とされているのか、考えさせた。なお、香川大学の歴史に関する授業部分については、本号所収『香川大学検定』を用いた自校教育の授業モデルの開発を参照のこと。

(3) キャンパス外、授業外でも学ぶ姿勢を身につける

本物の芸術に触れる機会として、香川県立ミュージアムの棟方志功展、および香川大学 EU 情報センター（他）主催「EU フィルムデーズ」による EU 映画の鑑賞を行った。また、毎回の授業終了時に「今日の一冊」を紹介し、日頃からの読書を奨励した。

(4) グループワークで自らの学習成果・意見を他者と共有する

キャンパスライフ・香川大学史・映画『長州ファイブ』・読書をテーマに、4回グループワークを行った。基本的姿勢を段階的に身につけさせるため、それぞれの回に「三猿禁止」（見ざる、言わざる、聞かざる）などの具体的な指示を出して進めた。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

大学生活の過ごし方について計画を立てる一環として、教育・学生支援機構の西本佳代助教に、「香川大学生の役割」というタイトルで、①香川大学生として守らなければならない最低限のマナーとルール、②最低限からレベルアップして地域社会に貢献しているスーパー香川大学生、の2点に焦点を当てて、授業を行っていただいた。

3. 評価方法

成績評価は、①出席点（45点）、②レポート（20点）、③期末テスト（35点）の3つの方法で行った。出席点は宿題または授業中に書くミニ・レポートの提出状況、レポートは「大学入学後3ヶ月間に読んだ本（1冊）についての感想（1,500字以上、漫画・雑誌・教科書不可、言語不問、締切は7月7日の授業終了時）、期末テストは持ち込み不可とし、授業時に提示した8つのキーワードを中心とする論述式のテストとした。

なお、ボーナス得点として、①正課外で行われる KIP を受講して修了証書を授与された場合（+10点）、②同じく正課外で行われる学生基礎力 UP 研修を受講した場合（1講座につき+2点）、という特例を設けた。ただし、これらのボーナス得点は+10点を上限とした。

4. 教育成果

学生による授業評価アンケートでは、「教員の熱意」「話し方」「視聴覚機器」「予復習の工夫」の評価が高く、他はおおむね主題 A の平均値と同程度であった。グループワークについては、「みんなが手を抜くことなく、一生懸命自分の役割をこなしていたので、円滑にグループワークが行えた」、「全体として良かった点は皆が積極的に話し、聞き、質問していたところです」という評価も散見され、概して良好だったと思われる。

5. 来年度の課題

今年度はじめての授業ということもあり手探りの中で実施したが、欲張りすぎて焦点がぼやけてしまったことが反省点である。県立ミュージアムの展覧会や EU フィルムフェスティバルの映画鑑賞は、学生の評価は高かったものの、それぞれの内容が授業で扱っている内容とはリンクしなかったため、「大学とは何か」というメインストリートから逸脱してしまった感が否めない。来年度、改善の余地ある点と思われる。

(山本珠美)

キャリア・デザイン入門

1. 授業の進め方

この授業は、単にどんな「職業」に就きたいのか、という狭い視野で将来を考えるのではなく、自分がどのような「人生」をおくりたいのか、あるいはどういう「生き方」をしたいのかを十分に考えるなかで、「人生」や「生き方」の主要な部分となる「職業」についても考えていくものである。現在第一線で活躍中の各界の関係者、あるいは学生同士でのコミュニケーションを通して、「キャリア」について考える機会を提供する授業である。

具体的には、ゲスト・スピーカーの回には、ゲスト・スピーカーからの話を聞いた後に、それらの話をふまえたグループ討論を行っている。グループ討論の回には、討論の内容をふまえたレポート課題を課している。そのサイクルを3回繰り返した後、社会において自己が果たすべき役割や自己の未来についての考えを深めてもらい、それらと今後の学生生活とを関連づけた内容のプレゼンテーションを行ってもらっている。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

「市民としての責任感と倫理観」を考える核として、第2回には、大学教育開発センターの佐藤慶太講師に、「人生・仕事・想像力ー倫理的な観点からー」というタイトルで、「想像力」をキーワードに、学生自身の日常生活を振り返らせる授業を行っていただいた。第3回には、教育・学生支援機構の西本佳代助教に、「市民としての責任ある行動」というタイトルで、ルールとマナーの違いを軸に、「市民としての責任ある行動」について学生に考えさせる授業を行っていただいた。また、ゲスト・スピーカーには、各々の話の中で、「市民としての責任感と倫理観」に関する内容を含めてお話しいただいた。

3. 評価方法

授業態度及びレポート、プレゼンテーション（以下、プレゼン）で評価を行っている。具体的には、授業態度はゲスト・スピーカー回（9回）で評価を行っている（9回×5点＝45点）。また、レポートは3回提出させ、それぞれ10点満点で評価を行っている（3回×10点＝30点）。プレゼンについては、グループ内でのプレゼンで1位に選ばれた学生には10点、2位に選ばれた学生には5点を配点している。また、グループ内でのプレゼンで1位に選ばれた学生のうち、上位に選ばれた学生には10点、その学生が所属するグループには5点を配点している。さらに、正課外で行われるKIPや学生基礎力UP研修を修了した学生には、ボーナスポイント（5点以上）を加算している。

なお、事前連絡なしでの欠席・遅刻・早退があった場合には、1回につき、5点の減点としている。また、私語・居眠り等、授業の雰囲気を乱した場合にも、5点の減点としている。ここまで厳格にやる理由を、学生たちには以下のように説明している。すなわち、この授業では外部からゲストを招いて話をしてもらう以上、それなりの対応をしなければいけないことだけでなく、外部の人間が授業を受けている自分たちをみるということが何を意味しているのか、この意味を考える必要があることや、

こうした常識的なルールを守れない人間は就職の可能性が低くなることについて説明している。

4. 教育成果

学生による授業評価では、「この授業は、将来の自分にとって有益である」の値が4.43、「あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか」の値が3.77、「あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか」の値が4.17であり、前期に開講された主題Aの中でも高い評価が得られていた。自由記述でも非常に肯定的に評価されていた。

「たくさんの社会で仕事をしている人達の話聞いて、ためになったと思います。だらだらしてはいけなと心底感じました。大学生活の4年間をむだにしないために、1年の前期という早い時期にこの講義を受けられてよかったです。」(工学部)

「普通だったら絶対に聞くことのできないような人の話をきけて視野が本当に広がったと思う。他の学部の人とこんなにしっかり話しあう機会なんてなかったと思うから良い勉強になった。」(農学部)

5. 来年度の課題

来年度の課題としては、「市民としての責任感と倫理観」を、授業の流れの中うまく位置づけることに尽きる。先述のように、今年度は、「市民としての責任感と倫理観」を考える核として、佐藤講師や西本助教に素晴らしい授業を行っていただいた。ただ、授業全体の構成から見ると、この部分が少し浮いてしまっているのは否めない。また、ゲスト・スピーカーには、各々の話の中で、「市民としての責任感と倫理観」に関する内容を含めてお話しいただくよう依頼はしていたのだが、そもそもこの点について話をする事自体難しいこともあって、学生に伝わる形でお話しいただけなかったゲストも少なくなかった。来年度は、授業全体の構成を見直し、学生にその意義を伝えるとともに、ゲスト・スピーカーとも密なコミュニケーションをとって、こちらの授業意図を伝えたいと考えている。

(葛城浩一)

キャンパスから地域へ

1. 授業の進め方

この授業では、大学周辺で行われている地域貢献の内容を知り、実際に活動を行うことで、社会において、香川大学生である自分が果たすべき役割を探る。近年、大学の役割として教育、研究活動の他に、地域貢献が重視されるようになってきている。香川大学においても、これまで教職員協働で地域貢献に取り組んできた。だが、こうした取組は教職員ばかりでなく、大学卒業後に市民として活躍する学生自身にとっても、今後の生き方を考える上で重要である。そこで、昨年度より、キャリア関連科目の中で地域貢献について扱う授業が開講されている。

授業は大きく3つのセクションに分けることができる。第1セクションでは、地域貢献やボランティアに関する理論を学ぶ。その後、第2セクションでは、実際に地域貢献を行っている本学の教員及び学生をゲストとして招き、その実態を知る。そして最後、第3セクションでは、これまでに得た知識や経験をもとに、香川大学生としてどのような地域貢献ができるか、グループで話し合う。なお、授業のほか、受講生たちには学外で地域貢献するという課題も与えられている。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

「市民としての責任感と倫理観」はこの授業全体を通して培われるべき課題である。先述の通り、この授業の目的は、「地域貢献の内容を知り、実際に活動を行うことで、社会において、香川大学生である自分が果たすべき役割を探る」ことにある。すなわち、地域にいかに貢献すべきか考え、それを実践することが目的となるわけであるが、これは、「市民としての責任感と倫理観」のひとつの大きな要素だといえるだろう。自分の生活する地域をフィールドに、一市民として何ができるのか考える。本授業の実践がそのまま、「市民としての責任感と倫理観」の育成につながっている。

3. 評価方法

この授業では、出席状況とボランティア実践、及び最終レポートで評価を行う。点数の配分は、出席状況50点、ボランティア実践20点、最終レポート30点となっている。出席状況については、全13回（2回の履修登録期間中の授業は除く）の授業においてミニレポートを課して確認する。また、ボランティア実践は、5つの活動（①神輿かつぎ、②文化祭の出店補助、③道路の花植え、④小学生のカルタ大会審判、⑤プレーパーク）の中から選択してもらい、その実践についてのレポートをもとに評価する。さらに、最終レポートでは、全ての授業を振り返り、香川大学生としてどのような地域貢献ができるのか論述してもらう予定である。

4. 教育成果

この授業は、後期開講の授業であり、12月現在、まだ10回の授業しか行われていない。全授業を通しての教育成果について述べるできないため、ここでは、現在までにみられた学生の授業に対する感想から、この授業の教育成果について考察したい。

まず、授業の教育成果であるが、大きく分けて知識面と意識面での成果がみられた。知識については、これまで学生が知ることのなかった地域貢献の現状やコミュニティセンターの役割について理解できたようだ。また、意識については、実際にコミュニティセンターに訪問したり、教員や学生が実施している地域貢献の内容を聞いたりすることで、「どのように地域に関わっていくべきか真剣に考えるようになった」、「自分も地域貢献活動に参加したい」といった考えの変化がみられるようになった。

さらに、授業では実際にボランティアをすることも課題として課しているが、その感想からは、自分が地域の役に立っていると実感している様子が見えてきた。「若い人がいるというだけで地域の方に喜ばれた」「喜ばれてこちらまでうれしくなった」というように、地域に出て行くことの必要性や楽しさを肌で感じる事ができたようだ。

5. 来年度の課題

来年度の課題についても、まだ全授業を終えているわけではないので十分に論ずることができないが、現段階までに明らかになっている2点の課題についてここでは述べたい。

第一の課題は、地域の問題を学生の問題にする難しさである。1年次生の多くは高松市以外の場所から、大学入学と同時に移住しており、住んで1年足らずの大学周辺地域にそれほど愛着がない。そうした状況の中で、地域の問題を示しても他人事で終わってしまう。そうではなく、自分の問題として地域の問題を考えられるよう、ゲストスピーカーのお話や実践を通して、学生により具体的な事例を提示する必要がある。

第二の課題は、自主性の育成である。この授業は、学生にボランティアをするという課題を与えているが、その引率や引受先との手続きは担当教員が全て行っている。本来であれば、そうした手続きも学生が自主的に行うのが望ましい。授業中でのボランティア実践は制限を受けざるを得ない。しかし、最終的には自主的にボランティアに取り組める学生を育てることが目的であり、そのための環境整備が必要となっている。

(西本佳代)

キャリア・デザイン概論

1. 授業の進め方

この授業は、キャリアのデザインに役立つ「理論」や「ノウハウ」を学習することで、学生が自分のキャリアを考えていく際の視点や発想力を涵養するとともに、社会の各方面で活躍する人の講話を聴くことで、ロールモデルになり得る人の「志」「働く姿勢」「経験知」等を学ぶものである。カリキュラムの構成は、ゲスト・スピーカーによる講話として、倫理講話（1回）、職業事例講話（5回：経営者、県庁職員、会社員、研究者など）を、私の講義回の間にはさむようにして、毎回の授業が単調にならないようにしている。

ゲスト・スピーカーの回では、最後に質疑応答の時間をとり、学生が講師に質問できるようにしているが、講話内容に関するだけでなく就活のアドバイスを求める者もいる。講義の回については、視点や発想力の涵養に役立つ知識付与だけでなく、学生のマクロ環境認識を高めていくため、毎回の冒頭で、旬な話題を題材に取り上げて話をすることにしており、日頃から問題意識のアンテナを高く立てるように指導している。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

「市民としての責任感と倫理観」を考える核として位置付けている倫理講話では、就職先として人気のある一部上場企業の中から、CSR担当部署の幹部社員をゲスト・スピーカーとして招聘している。講話内容は、自社紹介、CSRの取組活動紹介、講師の働く姿勢・生き様の披露等であるが、全体を通じて、その企業における規範意識や実践活動がリアルに感じられるものとなっている。他方、職業事例講話でも当然ながら同様の趣旨のことが含まれるため、ゲスト・スピーカーによる講話は、計6回が全体として、「市民としての責任感と倫理観」の自覚促進や意識喚起につながっている。

3. 評価方法

成績評価は、授業への参画姿勢、期末レポートの内容をもとに総合的な判断をしている。具体的には、まず「授業への参画姿勢（50%）」では、出欠状況（出席管理システムによる機械記録）、計6回のミニレポートの得点（正課外で行われるKIPや学生基礎力UP研修を受講した者に付与するボーナス得点を含む）、授業への真摯な取組態度を総合勘案して評価している。なお、出席データを見ると、23年度前期授業は、無欠席者が75%（95人）、1回欠席者16%（20人）であった。次に「期末レポート（50%）」は、「自分の人生のイメージ（仮説）」を具体的な言葉にしていくことを支援する観点から課しているもので、採点においては、①学習成果（視点や知識等において、学びの成果を感じさせるか）、②具体性（自分なりに、掘り下げて考えているか）、③論理力（論理的な文章になっているか）、④表現力（伝わってくるものがあるか）、⑤全体を通じて実行することへの決意が感じられるか、という5つの観点から採点し合計得点を算出している。

4. 教育成果

学生による授業評価では、「この授業は、将来の自分にとって有益である」の値が 4.35、「あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか」の値が 3.70、「あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか」の値が 4.07 であり、前期に開講された主題 A の授業（9 講座）の中でも高い評価が得られている。なお、自由記述に書かれた意見には、以下のようなものがあった。

「普段、接することが出来ない人に会い、話しが聞けて、非常に有意義でした。色々な物の見方が得られました」（医学部）

「実際に社会に出て働いている人達から、心に響く言葉を多く聞けて良かった。自分の考え方や生活の仕方に影響を与えてくれるほどだった。授業の何%吸収できているかは分からないけれど、出て良かったと心から思える授業であった」（医学部）

「初めは単位を取るためだけにこの授業に参加したが、オリエンテーションで講師の熱意を感じ、真剣に取り始めた。素晴らしい授業だと思う」（農学部）

5. 来年度の課題

昨年度（平成 22 年度）、本学で初めて授業を担当したが、初年度を終えた後の感想は次のとおりであった。①個人差が大きく、講義のレベルやスピードの設定が難しい。②外部環境に対する関心が低い。③論理的に考え・話す・書くという訓練が不足している。

このような問題意識から、本年度（平成 23 年度）は、私の担当を 2 本立てで構成することとし、座学中心の本授業（キャリア・デザイン概論）を前期に移すとともに、新たに後期において「自分の生き方のビジョンを持とう（次ページ参照）」を開講した。

来年度に限ったことではないが、各学部の進路に関連した業界から、働く姿勢や規範意識においてロールモデルとなる人物を招聘するため、ゲスト・スピーカーの人選と確保に引き続き注力していく。

（杉本洋一）

自分の生き方のビジョンを持とう

1. 授業の進め方

この授業は、前期の「キャリア・デザイン概論」に比べ、より能動的な参加が必要な授業として平成23年度後期に新設した。その背景事情は、「キャリア・デザイン概論」の5で既述したような認識に基づくが、企図としては、「優れた組織・人に触れさせる」ことで感奮興起させ、「国際経験豊富な経営者と語り合わせる」ことで視野拡大と論理的説明力の向上をはかり、「生き方のビジョンについての仮説を構築させる」ことで自分の人生をパースペクティブに考えてもらおうということである。カリキュラムの構成は、倫理講話（1回：企業CSR担当部署幹部）、国内一流事例講話（3回：日本経営品質賞受賞組織（企業、行政、病院）の幹部）、ゲスト講師講義（7回：大手企業の国際経験豊富なCEO）、私のまとめ講義の4つを順に行い、気づきや学びが積み上がって、最後のビジョンづくりの土台になるようにしている。

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

「市民としての責任感と倫理観」を考える核として位置付けている倫理講話では、就職先として人気のある一部上場企業の中から、CSR担当部署の幹部社員をゲスト・スピーカーとして招聘している。講話内容は、自社紹介、CSRの取組活動紹介、講師の働く姿勢・生き様の披露等であるが、全体を通じて、その企業における規範意識や実践活動がリアルに感じられるものとなっている。他方、国内一流事例講話は、日本経営品質賞受賞組織を目安としているため、どの組織も理念の中に必ず「社会との調和」「顧客本位」「独自能力」「社員重視」が入り、「市民としての責任感と倫理観」と深く関連する内容になっている。ゲスト・スピーカーによる講話は、全体として、「市民としての責任感と倫理観」の自覚促進や意識喚起につながっている。

3. 評価方法

成績評価は、授業への参画姿勢、期末レポートの内容をもとに総合的な判断をしている。具体的には、まず「授業への参画姿勢（50%）」では、計11回のミニレポートの提出回数と合計得点（正課外で行われるKIPや学生基礎力UP研修を受講した者に付与するボーナス得点を含む）、授業への真摯な取組態度を総合勘案して評価している。次に「期末レポート（50%）」は、「自分の人生のイメージ（仮説）」を具体的な言葉にしていくことを支援する観点から課しているものであり、採点においては、①学習成果（視点や知識等において、学びの成果を感じさせるか）、②具体性（自分なりに、掘り下げて考えているか）、③論理力（論理的な文章になっているか）、④表現力（伝わってくるものがあるか）、⑤全体を通じて実行することへの決意が感じられるか、という5つの観点から採点し合計得点を算出している。

4. 教育成果

本稿作成の時点では、まだ授業が終了していないので、結果としての評価はできないが、授業の雰

囲気や学生の発言の状況を見る限り、ねらいに沿った効果が出ているように思われる。授業後のミニレポートに書かれた意見には、以下のようなものがあった。

(1) 倫理講話

「社会の一員であるという自覚を持って行動することのできる人間を目指そうと改めて思った」(教育学部)、「どんなに大きな組織でも一人ひとりの意識や行動が重要であると思った。自分も社会に出るまでに、そのような意識や行動を身につけられるようにしたい」(工学部)、「社会における自分の理想像を描き、自立した行動とその行動に対する責任を持った人間にならなければならない」(医学部)

(2) 国内一流事例講話

- ① 企業事例講話:「先ず言いたい、興奮した。今までで一番と言えるほど実りのある学習ができた」(教育学部)、「まさにハングリー精神とは何かを学生に示すものだった」(法学部)、「経営を向上させるため、こんなにも試行錯誤していることに驚いた」(農学部)
- ② 行政事例講話:「講話を聴いていなければ、今まで持っていた公務員のイメージのまま社会に出ていた。講話を聴けて本当に良かった」(経済学部)、「溢れんばかりの熱意と思いをヒシヒシと感じた」(教育学部)、「意識を変える、その言葉が心に残っている」(工学部)
- ③ 病院事例講話:「CSの貯金が重要だということに気づけてよかった」(医学部)、「生き方についての考えを吸収できるのがこの授業であると改めて思った」(経済学部)

(3) ゲスト講師講義

「今日の講義で一番感じたことは、物事を様々な角度から見て考えることで、また新しく色々なことが見えてきたり、違った考えが発見できたりするということである」(農学部)、「いざ発言してみると、意外にもできたので、皆の前で発言することも自分に出来るのだと思った」(法学部)、「自分の頭で物事を考えて、自分の意見を持つということが大切なのだと実感した」(経済学部)

5. 来年度の課題

来年度に限ったことではないが、各学部の進路に関連した業界から、ハイレベルな組織・人物を招聘するため、ゲスト・スピーカーの人選と確保に引き続き注力していく。

(杉本洋一)

学生の規範意識

1. 授業の進め方

この授業では、規範意識を題材として、学生はどのように生きるべきか、また生きているのか考える。授業は3つのセクションに分けられ、3名の教員がそれぞれを担当した。第1セクションでは、社会と学生との関係は、戦後どのように変化してきたのか学ぶ（担当：葛城浩一准教授・大学教育開発センター）。その後、第2セクションでは、そもそも規範の根拠をどのように考えたらいいか、哲学的な思考を深める（担当：佐藤慶太講師・大学教育開発センター）。そして最後の第3セクションでは、規範意識を軸に、自らの今後のキャリアについて考える（担当：教育・学生支援機構特命助教・西本佳代）。これら一連の作業を通して、社会において自己が果たすべき役割や、市民としての責任ある行動について理解を深め、そこから自己や社会の未来について考えることができるようになることがこの授業の目的である。

<授業計画>

第1・2回：イントロダクション・学生と社会との関わり①【葛城】

第3・4回：学生と社会との関わり②③【葛城】

第5・6回：規範の根拠について考える①②【佐藤】

第7・8回：規範の根拠について考える③④【佐藤】

第9・10回：学生の規範意識を考える①②【西本】

第11・12回：学生への期待・キャリアデザイン①【西本】

第13・14回：キャリアデザイン②③【西本】

第15回：まとめ【西本】

2. 「市民としての責任感と倫理観」の取り扱い

「市民としての責任感と倫理観」はこの授業全体を通して培われるべき課題である。先述の通り、この授業は、規範意識を題材として、学生はどのように生きるべきであり、また生きているのか考えることを目的としている。学生は、大学という教育機関において教えられる立場にあるのはもちろんだが、一市民として大学周辺地域に生活しているということも忘れてはならない。また、大学を卒業すれば、仕事を通して社会と関わることになる。そうした自分の現状やこれからのライフステージを考慮した上で、どのように生きるべきか考えることがこの授業の目的であり、その学習の過程では、必然的に市民としていかに生きるべきか考えることになる。また、第9回・第10回の授業では、特に「市民としての責任感と倫理観」を考えるための時間を用意した。その時間では、香川大学生のルールやマナーに対する意識・行動を題材に、市民としていかに生きるべきか考えた。

3. 評価方法

この授業では、出席状況とプレゼンテーション、グループディスカッションへの参加状況を総合的

に判断し、評価した。点数の配分は、出席状況 70 点、プレゼンテーション 30 点となっている。その他、グループディスカッションに積極的に参加する学生には適宜加点し、反対に、大幅な遅刻を含め、グループディスカッションへの参加意欲がみられない学生は減点した。出席状況については、全ての回に出席した学生を 70 点として、欠席があるごとにその点数から減点した。プレゼンテーションについては、「これからの自分の生き方」と題し、第 15 回の最終発表へ向け、パワーポイント資料を準備させた。その資料の完成度と当日のプレゼンテーションを評価し、30 点を満点に配点した。

4. 教育成果

学生による授業評価では、「自学自習の促進度」の値が 3.38、「到達目標の達成に向けた授業」の値が 3.95 となっており、前期に開講された主題 A の中でも高い評価が得られていた。また、「色々考える工夫がなされていて、よかったです。」(経済学部)といった自由記述の感想もみられた。夜間主の学生に開講されている主題 A の科目は本授業しかなく、学生たちは自分の興味関心にそった選択をすることができない。また、既に仕事を持ちながら授業に参加する学生とそうでない学生が混在する中、一人一人の問題意識にそって、「人生とキャリア」について考えさせる授業を展開することは容易ではない。もちろん、次年度へ向けた課題はあるものの、そうした状況の中、まずまずの教育成果を得られたといえるのではなかろうか。

5. 来年度の課題

来年度の課題については、大きく 2 つ挙げられる。1 つ目は、学生一人一人の問題意識にそって「人生とキャリア」について考えさせる授業を展開することである。先述の通り、この授業の受講生には、既に仕事を持っている学生とそうでない学生が混在している。そうした多様な背景を持つ受講生を対象としていることを十分に自覚し、一人一人に訴えかけることができるよう授業を工夫することが今後の課題である。また 2 つ目は、授業全体の構成である。この授業は、3 名の教員によるオムニバス形式の授業であったが、個々の教員が担当する回のつながりを十分に意識できないところがあった。そのため、受講生は、なぜ今この内容を学習しているのかよくわからないという状態に陥っていたのではないかと懸念される。それぞれの教員の持ち味を活かしつつ、授業全体がひとつのまとまりとして成立するよう、さらなる工夫が求められる。

(西本佳代)

おわりに—来年度の課題—

来年度の課題としてまず挙げられるのは、履修する講義を学生がどのように決定するかという点である。主題 A「人生とキャリア」は必修科目であるため、受講調整の結果、学生がどの講義も受けられなくなるような事態は避けなければならない。そのため、主題 A 担当者会議（10 月 25 日）では、前期の授業開始以前に希望調書をとることも検討されたが、実際に授業を受けずに、学生がシラバスだけで講義内容を判断することはミスマッチにもつながりかねないと判断した。最終的には、他の授業と同様に、受講調整が必要な場合には、学生がどの講義も受けられなくなるような事態が起こらないように配慮しながら行うことを確認した次第である。来年度の学生の動きを見ながら、受講調整が極力起こらないような時間割を組んでいく必要がある。

なお、本年度は、前期に 9 科目、後期に 3 科目開講しており、その受講状況は、前期 1,098 名（86.5%）、後期 248 名（19.5%）である（合計で 100%を越えているのは、前期履修者のうち不可（33 名）・放棄（23 名）の者や重複履修者（50 名）がいるため）。必修科目であるため、学生の心理としては、前期に単位を取得しておきたいと思う学生も多いと考え、主題 A 担当者会議（10 月 25 日）では、来年度は今年度よりも前期開講数を増やすことも検討された。しかし、現行の 9 科目のままでも、1 年次の学生全員を受け入れるキャパシティはあること、また、後期の選択肢をある程度残しておくことも必要ではないかという判断から、今年度同様、来年度も前期に 9 科目、後期に 3 科目開講することが確認された。

また、成績評価も大きな課題である。必修科目である以上、講義によって成績評価に偏りが生じるのは避けなければならない。主題 A 担当者会議（6 月 24 日）では、議論の末、秀を 3～6%、優・良・可をそれぞれ 30%、不可を 3～6%の割合で考えるという申し合わせを行った。しかし、前期開講科目の成績をみると、必ずしもこの申し合わせに沿った成績がつけられているわけではなかった。その後の主題 A 担当者会議（10 月 25 日）では、この申し合わせの割合がそもそも厳しいのではないかという意見もあったことから、来年度に向けて、この申し合わせの見直しを行っていく予定である。

これらの課題は非常に重要であるが、それらにもまして重要な課題が、共通教育スタンダードを「より」意識した授業を行うことである。すでにみてきたように、各担当教員は、主題 A が目指す「市民としての責任感と倫理観」の育成を意識した授業設計を行っている。しかし、自分の授業を省みても、この「市民としての責任感と倫理観」が授業の流れの中うまく位置づけられているとは言い難い。来年度からは、学生による授業評価項目として、共通教育スタンダードに対応した「この授業は、社会において自己が果たすべき役割について考えることができる」という新規項目が付け加わる。この項目で低い評価を受けることのないよう、主題 A 担当者会議や、今年度から本格的に実施されるシラバス・チェック等の場を通じて、各担当教員には、共通教育スタンダードを「より」意識した授業を行っていただくよう、呼びかけていく所存である。

（葛城浩一）